第 26 回 建築環境デザインコンペティション

隠れ庭の雪住まい

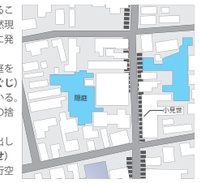
❄ 隠庭 - かぐじ -

青森県黒石市。豪雪地帯であるこの地域では、昔から雪という自然現象と対峙するための空間が独自に発展してきた。

黒石の家々は母屋の裏にある庭を隣家と共有することで**隠庭（かぐじ）**と呼ばれる余剰空間を形成している。隠庭は冬には屋根に積もった雪の捨て場となる。

また、表側には各住戸が軒を出し共有することで、**小見世（こみせ）**と呼ばれる冬でも使用可能な歩行空間を形成している。

しかし、現在は空き家の増加により、雪を捨てるという小スケールのコミュニティは消え、その隠庭空間は単なる空き地として存在している。



隠庭（かぐじ）

小見世（こみせ）

❄ 自然と対峙する集合体としての建築

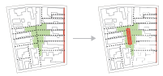
人間が地球環境に住まうということを考えたとき、その関係性の中にある作法を体現したものとして建築を考える。

1住戸で豪雪に向き合うことは出来ない。黒石では通り沿いの小見世に見られるように、自分の土地をそれぞれが共有空間として差し出すことで、冬の通り道を確保している。本提案では、シャッター街の裏側にひっそりと存在する隠庭空間を再解釈し、コミュニティの最小単位として住人同士を繋ぎ、循環する自然と人との関係を構築することで、雪とともに生きる新しい風景を作り出す。

隠庭側の私有地を共有し、雪を利用できる建築を作る。自然に対抗するのではなく、受け入れ、街区単位でインフラとして共有することでコミュニティを作るのと同時に、自然への環境負荷を低減する。

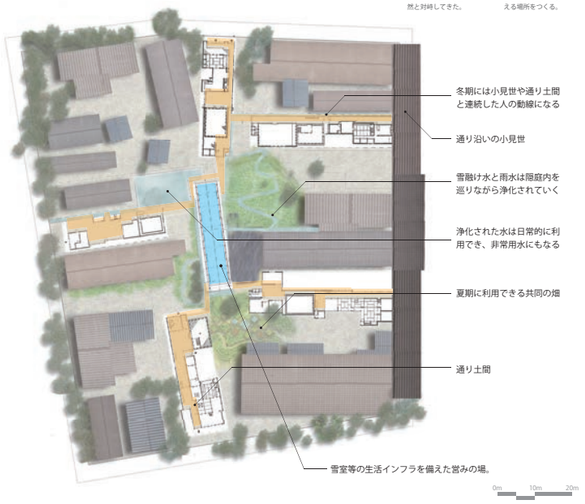
❄寄り添い、分け合う作法空間

隠庭に存在する敷地境界線をまたぐように建築をつくる。表側の小見世空間が都市に与える私有地であるのに対し、この建築は街区単位での小さなコミュニティを育む空間、そして雪や温泉熱を蓄積し、共有されるインフラの機能をもつ。広い空き地であった隠庭は住民の営みを支え、自然と対峙するための場となる。



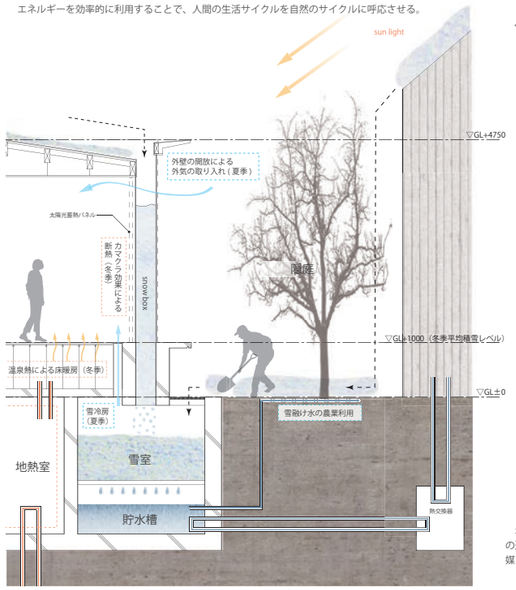
自らの敷地を差し出し共有することで自然と対峙してきた。

ふたたび共有することで人々の営みを支える場所をつくる。

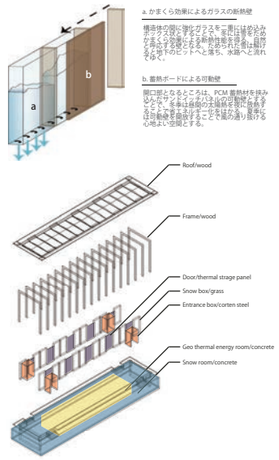


❄雪と呼応し、揺らぐ建築

屋根に積もった雪は壁面のスノーボックスに蓄えられることで建築の表情が変化する。豪雪という自然現象に対し、人の空間を保護するだけでなくその性質を利用した機能を付加しエネルギーを効率的に利用することで、人間の生活サイクルを自然のサイクルに呼応させる。



≪壁の構成≫



a. かまくら効果によるガラスの断熱壁

構造体の間に樹脂ガラスを二重に組み込みガラス間を空けることで、冬には温室効果による熱的性能を保ち、自然光を取り込むことができる。なめられた面は解体しやすいことから、水路へと流れを導く。

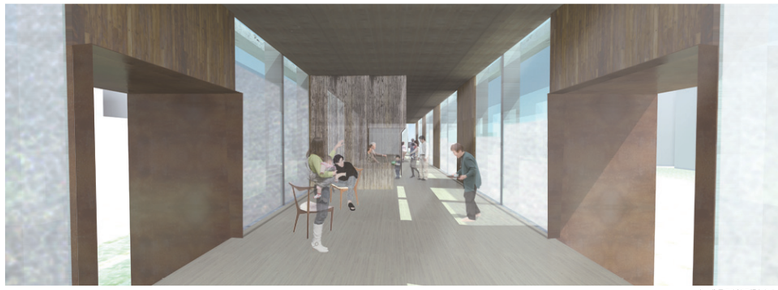
b. 蓄熱ボードによる可動壁

開口部となるところは、PCM 蓄熱材を挟みこんだサンドイッチパネルの可動壁とすることで、冬季は住宅の太陽熱を室内に蓄熱することで温室効果を高め、夏季には住宅動線を阻害することで風の通り抜けなど心地よい空間とする。

地下には、雪室と温泉熱を利用した地熱室を設け、冬季、夏季で空気の通り道を変化させる。雪室からの雪融け水は隠庭を共有する住戸の冷媒となり、水路を通過して農地へ流れる。

❄冬の道、夏の庭

隠庭に建つ建築は間のモデュールで出来ており、間仕切りをもうけ小部屋をつくる、引き戸を開放して外部と連続した大空間をつくるなど様々な使われ方をする。冬庭には雪下ろし作業の休憩所、夏はゆぶたの制作等交流の場となる。



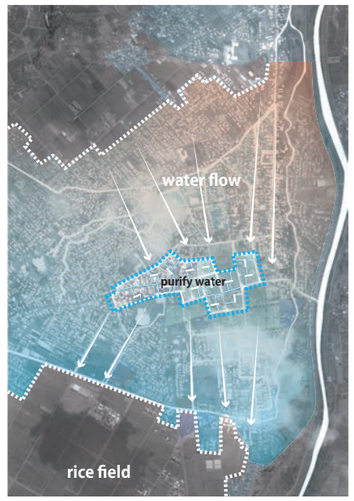
冬：住民の交流の場となる

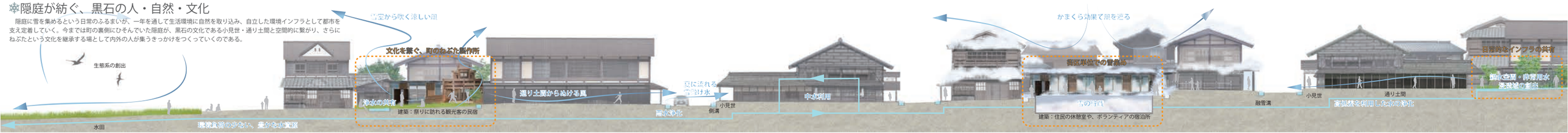
夏：外部と一体的に利用

冬：小見世から通り土間を抜ける

❄隠庭コミュニティが支える都市基盤

冬だけ利用されていた融雪溝が、隠庭内での雪貯蔵や水路再整備を行うことで、雪融け水や雨水を一年中都市に循環させる。西側に向かって傾斜している地形に沿って流れる市内の水を、隠庭が環境フィルターとなって水質浄化し、豊かな水資源として水田に供給する。水インフラの更新時期を迎えている黒石市を、日常的な人の生活空間から生まれる地域インフラから支えることで、災害弾力性の高い都市へと再構築する。



❄隠庭が紡ぐ、黒石の人・自然・文化

隠庭に雪を集めるという日常のふるまいが、一年を通して生活環境に自然を取り込み、自立した環境インフラとして都市を支え定着していく。今までは町の裏側にひそんでいた隠庭が、黒石の文化である小見世・通り土間と空間的に繋がり、さらにねぶたという文化を継承する場として内外の人が集うきっかけをつくっていくのである。